日本科学者会議

福岡支部ニュース

2007 年 10 月 17 日発行　No. 191

● 日本科学者会議事務局

〒 113-0034　東京都文京区湯島 1-9-15
Tel (03) 3812-1472

● 福 岡 支 部 事 務 局

事務局長　青野　雄太
〒 819-0395　福岡市西区元岡 744
九州大学大学院工学研究院機械科学部門
Tel: 092-802-3281　Fax: 092-802-3065
E-mail: aono@mech.kyushu-u.ac.jp
郵便振替　福岡　01790 – 1 – 5576

目次

1. 全国幹事会報告
2.「日本の科学者」読書会夏合宿
3. JSA 公害環境委員会を水俣で開催
4. 福岡環境研究会報告

1. 全国幹事会報告

福岡支部事務局より。
9/15 （土）～ 16 （日）全国幹事会が開催されました。主な内容についてコメントします。

(1) 憲法問題への取り組み強化
学生が主催する Peace Night 9 というイベントの準備が進むなど、全国的に積極的な運動が展開されています。科学者会議の会員としては、九条科学者の会への積極的な協力が呼びかけれらました。

事務局では大会決定に基づき、憲法問題研究特別委員会を立ち上げる準備を進めています。この委員会の研究目標は、<1> 平和主義、民主主義、基本的人権が新国家主義と新自由主義によって犯されている中での歯止めとしての実態論的意義、<2> 21 世紀日本社会の展望の中での意義、<3> 21 世紀国際社会の展望の中での意義を明らかにする、といった憲法の意義を明かにすることです。また、他の委員会も連携を取り、持続可能社会について憲法から展望するなど、さらに発展させることも考えています。

(2) 会員拡大について
どの支部も年間５％の新会員の獲得を目標とすることが確認されました。この５％という数字は、会員減少を食い止め、現会員数を維持するために必要な数字です。また、今年も拡大強化月間を２回行なう予定です。

(3) 「日本の科学者」

2008 年 3 月号までの執筆陣はほぼ決まっていますが、それ以降の積極的な寄稿が呼びかけられています。寄せられる内容は編集委員会において掲載月や特集など割当てが決められますが、寄稿・企画の提案などよろしくお願いいたします。

(4) 国際活動

国際部では、世界科連の活動の低下に伴い、INES (International Network of Engineers and Scientists for Global Responsibility) との交流について準備が進められています。「日本の科学者」10 月号 52 ページ「科学者つうしん」に「世界科学者連盟と INES」の記事が寄せられていますので、お読み下さい。

(5) JSA 学術体制部合同シンポジウム「高等教育と科学・技術の真の発展のために」

学術体制部が標記シンポジウムの準備を進めています。開催日は 2008 年 1 月 26 日で、17 総学のプレシンポと位置付け、各研究委員会が報告や政策要求を行なう予定です。（青野雄太）

2.「日本の科学者」読書会合宿

2007 年 8 月 19,20 日の両日、「日本の科学者」読書会のメンバー（12 名）は合宿・学習会を行った。

教材は第 1 日目が「IPCC 第 4 次評価報告書第 1 作業部会報告書政策決定者向け要約」（2007.3.20 気象庁訳）であった。本報告の特徴は、一言で言えば、2001 年の第 3 次報告以降の科学的進歩———新しいデータとその解析、諸過程の理解とそのモデルシミュレーションの改良により、不確実性の範囲が狭まったといえることであろう。「20 世紀半ば以降に観測された世界平均気温の上昇のほとんどは、人為起源の温室効果ガスの増加によってもたらされた可能性がかなり高い」（p.12）の中で、「可能性がかなり高い」は発生確率が 90% を超えることで、第 3 次報告では発生確率が 66% となっていた。具体的には、放射強制力（対流圏界面における放射強度の上向きと下向きの差であり、W/m^2 を単位として表される）は CO_2, CH_4, N_2O で夫々 1.66, 0.48, 0.16 である。CO_2 の増加は化石燃料の使用及び土地利用の変化に起因する一方、メタンの一酸化二窒素については、農業による排出が主な要因である。そして、6 大陸毎の温度変化は人為起源の強制力をとり入れたモデルによってのみ再現されることがわかった。将来予測その他についても述べられているが、「経済」10 月号（新日本出版社） を参照していただきたい。

2 日目はレーチェル・カーソンの「沈黙の春」を教材とした。第 2 次大戦後から本書の出版時（1962 年）まで、大量多種の殺虫剤が農地や森林にまかれ、害虫・益虫ばかりでなく、森や湖、川の鳥や魚がいなくなってしまった。殺虫剤にさらされた昆虫は抵抗力を身につけ、さらに強力な殺虫剤が開発され、「いたちごっこ」がくり返された。カーソンはこれを告発し、化学物質に頼るよりも、点滴など自然のサイクルを生かす方策を訴えた。

本書の出版後、農薬業界は 25 万ドルを使って、反カーソンキャンペーンをはり、攻撃したが、本書の説得力の前に反響をよぶことができた。ケネディ大統領（1961 ～ 63 在位）の指示で、科学諮問委員会ができ、残留毒性の強い有機塩素系農薬の使用禁止などにつな

がった（2007.5.21 朝日新聞）。しかし、これらに類似の毒物は 65 年以降ベトナムで大量に使用されたことは忘れてはならない（科学者のベトナムレポート――アメリカの毒薬・毒ガス作戦 ,BCW 研究会・京都平和委員会編 , 汐文社 ,1967）。（岸本　誠）

3.　JSA 公害環境委員会を水俣で開催

この９月７～ 10 日に「JSA 公害環境委員会」を開催しました。水俣でのエクスカーションは、水俣病の現地視察と水俣病資料館で語り部の話しを聞きました。参加者は、各地から委員１２名、岐阜大学と島根大学から併せて 23 名の学生の参加があり総参加人数は 35 名となりました。

委員会では、地元貢献の意味でシンポジウムを開催しました。水俣の産廃に反対している団体と共催としました。現在水俣市で問題になっている「産廃処分場」をテーマにして９月８日（土曜日）午後に開催。講演は会員の馬奈木昭雄弁護士に「産廃処分場の問題点」を、また地質学者の坂巻幸雄氏には「水俣産廃処分場の地質面の課題」の内容で話していただきました。

暑い日でしたが、熱心に約 80 名の市民の参加がありました。夜には地元で有名な福田牧場の直営レストランで懇親交流会も行い、有意義なシンポジウムとなりました。

水俣病被害者の語り部の話は、なみだ無しには聞けないような悲惨な話でした。水俣病が起きた初期段階で、新たに生を受けた子どもは胎児性水俣病であり、生まれた子どもと入れ替わるように、夫も水俣病でのたうちながら亡くなったという今年 80 歳の女性上野エイ子さんの話しでした。ご本人も認定患者であるが、なんとか水俣病の悲惨さと二度とこのようなことが起きないように願いを込めて、語り部を続けていると話されていました。

エクスカーションで川辺川ダムを扱いましたが、現地の反対運動を続けている方々に、実情報告をいただきましたが、1 時間半の予定が夜 8 時から 11 時過ぎまで熱心な討議となり、宿の温泉消灯に間に合わなかったヒトが出るハプニングも起きました。翌日はダムサイトの見学となり、やはり現地の活動家のおかげと宿の好意で（安くバスを出していただき）無駄なダム計画の実情を改めて確認することができました。学生たちは、まだ 1 年生ながら下調べもある程度こなしてきており、単なる旅行でなくテーマのある旅となって、きっと将来この体験を糧にして世の中に出てくれると期待しているところです。

水俣に関しては、相思社の高嶋由紀子氏の全面的な協力によりシンポジウム、エクスカーションとそのバスや語り部の手配、委員会の会場確保までお世話になりました。また川辺川ダムに関しては球磨川・ラフテンググループの重松貴子氏に全面的にお世話になり、今回の企画を無事終了できましたことを記して感謝の気持ちとさせていただきます。（河内俊英）

4.　福岡環境研究会報告

福岡環境研究会６月例会

「学生の主体性を培う修学環境とは―学生相談の視点から―」

6 月 30 日（土）、田中健夫氏（九州大学高等教育開発推進センター・准教授）を講師に標記の例会を開催した。参加者は 15 名程度であった。講演途中でも度々討論があり、こ

の問題に対する意識の高さがうかがえた。

講師は九州大学の六本松・伊都新キャンパスで学生相談を行なっており、移転後の新キャンパスの現状についても報告があった。約 100 年を経て生活環境も充実している既存キャンパスト比べ、新キャンパスは発展途上にあり、大学が実施したアンケートによるとサークル活動など人間関係をつくる時間が減少していることがわかる。その一方で、学生が新キャンパス周辺地域の活動に参加したり、自主的に新たな活動を立ち上げたりといったことが見られる。大学はそういった活動を支援したり、移転前のキャンパスにあった学生の文化を継続しやすい環境をつくることが望まれる。

学生相談に訪れる学生の問題の多くは、大学入学以前の受動的「生徒」から自律的に勉強を進める学生への転換がうまくいっていないことに集約される。これは、学業に関する具体的話題よりも学生の内面的な問題に起因していると考えられる。この内面の問題は、親が悪いとか、今の学生は甘いなどの言葉で片付けられることもあるが、正面から取り組む必要がある。ここで田中氏は教育課程に組み込まれている修学上のハードル、例えば専門課程への進学やコースの選択などの機会に、意識的に行き詰まり、それを克服する仕組みを強化していくべきであることを説いた。

一方でいつまでも行き詰まらない学生も存在する。この場合、行き詰まりからの逃避が行われており、高学年次になってより深刻に行き詰まる可能性がある。このケースもカリキュラム上のハードルを利用して学生を支援していく必要があると思われる。（青野雄太）

福岡環境研究会７月例会

「養護学校の体験から」

７月 28 日、堤静雄氏（数学教員、現在八女学院非常勤講師）を講師に環境研例会を開催した。講師は高校で３０年、その後知的障害者の養護学校で８年数学を教えた経験を持つ。私は知的障害のことについて特に関心はなかったが、様々な面で勉強になった。堤氏は養護学校に移るとき、周囲の方から「数学の授業ができなくなったね」と言われたが、むしろ問題点がよく見えるため真の数学教育に携わることができたとのことである。例えば順序数と集合数の違いなど、健常者が特に意識せず理解できることとその理解の仕組み

について知らなければ、知的障害を持つ人に数学を教えることはできない。こうしたことは脳の仕組みと深く関わっており最新の知識を得ることも必要であるし、それらを現場に落としこむことは、高度に専門的な仕事になると思う。しかし、養護学校の現場ではあきらめも存在する。数学の概念など知らなくても生活することは可能である。むしろ着替えなど生活面で健常者と同じことができるようになるような訓練を重視するべきではないか、日々葛藤がある。講師から、歩けない者は一生歩く練習か、養護学校の目的は健常者に近づけることか、逆に質問があった。時間の関係で深い議論はできなかったが、理想としては養護学校はなくして誰もが同じ学校に通うべきではないかという気がした。全ての人がそれぞれ立場で生きていくためには、多様性について理解が必要である。最近議論されている学校選択制度などは教育の本来の意味を無視したとんでもない制度である。また、ここのところ化学物質による後天的な障害発生が問題になっているとのことであった。障害から社会の様々な問題が見えてくるようで、大変有意義な時間を過ごすことができた。(青野雄太)

福岡環境研究会９月例会

電磁波の学習会報告

９月１日、九州工業大学の岡本教授による講演「電磁波の生体への影響と予防原則」がありました。時代を反映してか、５５名もの参加がありました。科学研究に向かう岡本教授の真摯な態度が伺える非常に良い学習会でした。

難しくて私の力では紹介できない内容もありましたが、強く印象に残ったことを記します。

同じ問題に対して、安全が証明されてないから危険と言う人もあれば、有害という証拠はないから安全という人もいる。真実がどこにあるか、自分でよく考えること。

疫学的な因果関係だけでは科学的ではないなどと言って危険性を否定する人（政府）がいる。科学的という言葉を安易に使ってはならないし、だまされてはならない。ある政党の原爆被爆者に対する対応のように、選挙の結果によって変るような主張は最も非科学的。

科学は遠い宇宙の研究や細胞内の極微の研究は非常に進んでいる。しかし、携帯電話の影響などのような身近な問題についての研究は遅れている。

兜教授の電磁波の疫学的研究は、国内では散々な目に遭った。電力会社によって、インターネットには実名でＣ評価されている。国会でもたたかれ、研究費は途中で打ち切られた。しかし、彼の研究はＷＨＯでは高く評価された。

対処方法としては、電化製品から離れることと、使用時間を少なくする、必要がある。離れることができないドライヤー・ひげ剃り・携帯電話は特に要注意。子供や胎児は影響を受けやすいので特に注意が必要。(堤　静雄)

(環境研究会の報告は「日本の科学者：支部活動報告」に掲載したものを，編集部の承諾を得て再掲させていただきました)